

緑字生ズ 紙田 彰

（紙田の緑字）は正 則 文の解 説 書 である



水津 榎 香い潮音 oil 116.7×90.9cm

妄想の破片

《魂の形態》勾玉、渦、光の渦。頭部の形プラス尻尾という構成。首から下の肉体は尾部の発達したもの、末端。光の渦は無を中心を持つエネルギーの形、ブラックホール。渦の動的な姿を示す尻尾、精子。卵子は受け容れる器。精子というエネルギーが卵子という器の中で充実し、外枠を押し広げて成長する。宇宙の卵殻の中で散在している光の渦が、受胎空間の中を移動する。一箇の光の渦が閉じられた宇宙であることから、この移動は《横切る》という飛躍。人間の形は女性的だが、繋がるべき生命力の形は男性的……。《生命装置》の *radical* な発現は、(1)生命の実現、つまり細胞レベルでの分裂・増殖の正のベクトル、(2)生命活動の抑制という負のベクトルに代表される。生命活動とはこの正・負の機能を同時に支えることに他ならない。生命遺伝子《オンコジン》。生命の正・負の機能の原因として、この物質が装置されている。《ヘガンという疾病》は生体に異物を対峙させるといふ、(2)の方法。オンコジンは、発ガン因子《イニシエーター》をガン化の記憶を呼びますものとして、発ガン促進因子《プロモーター》をその記憶の連続性を保証するものとして、日常的に用意し、これをコントロールする。《ガン自体は純粋に異細胞の《生命活動》であり、宿主細胞は異細胞の側から見る限り、エネルギー源としての生体の維持に不可欠の要件である。だが、《ガン細胞》の自己目的はガン細胞自身の構築性にあるわけではなく、負のベクトルに対する生命活動の正方向という抑制を解放することにあるので、宿主細胞の維持は過渡的なものである。初期ガン以前の段階、ガン細胞の数が数十万箇に達して疾病として活性化するのは、逆に相互の維持作用が必要であること。異細胞の存在が《インターフェロン》などの免疫物質の誘起によって、活性化に至らない、疾病因を排除すること。この過渡性、オンコジンの正・負の領界における指令の傾きに関与する自然年齢。ガンの疾病化の始まりを示す中心帯。近代までの生命時間、五十年前後と対応。《ヘガンという概念》は(2)による負のベクトルに決定づけられているが、それはあくまで生体の側からの見方で、《ヘガンという生体》の側からは生命活動という物質の構築性を否定し、宿主を無に帰するばかりか、自ら死の淵へタイピングする《反ヘガンの生命活動》という《正方向性》を有している。オンコジンが、冷徹で機械的で、あくまで一神的な《世界の調和と統制》というバランス機構であるのに対して、ガン自体の持つ死生観には、生命装置を媒介にして支配された世界性を超越する構造があるようだ。死を自己目的とした反世界。《とはいえ、ガン化は用意されたものであつて、それ自体、反世界的ではない。個体としての生命とは相容れることはないが、生命思想としては以毒制毒の効として世界の奴隷である。《ヘガン治療》は、妄想的にはこの異細胞に構築性を持たせ、そのことによってガン化細胞の《生体としての維持機能》を産み出し、そのための宿主との共存関係を作らせるか、宿主を奪取して別の生体として立つか、あるいは宿主の側が正常細胞を捨ててガン細胞にある構築物として組み換わすかすればよいのだが、この構築性そのものが生命という抑制を解放するという形而上的レベルにあるのだから問題にならない。《鈍麻。正・負のベクトルの傾きを支配するオンコジンを、麻痺、睡り、正方向の活性化、肉体時間の混乱に導いて、生命装置を弛緩させること。オンコジンの正方向のベクトルの力を抑制することによって、バランス全体の振幅を小さくすること。生命エネルギーの溢れた正常細胞に対する抗体を産生させて、生命装置の機能を低下させ、相対的にガン化の細胞活動を衰弱させる。《生命が装置として存在するとは……。《妄想神学》物質的現実は一神による全体としての一宇宙の、多神的な重なりである。またその現実と肉体は全体としての一神の現れにすぎず、神の次元によ

って自由に改変できる(物質及び現実とは存在のモナドにすぎなく、始まりであり、結果ではなく、他の何の存在にも及ばない)。現実世界は、その神の意図による物質の規範ののりついで、ただそれだけのことで、実は簡単に(肉性を恐れなければ)くつがえすことができる。精神及び神、靈などの観念的宇宙は多神的に存在しており、正邪、善悪などはそれそれぞれの宇宙の対立の形であって、意味をなさない。基本的には一神の全体に収斂されるものだが、物質世界などはある一神の現れにすぎず、ただその現れは他の神の介入も含め、平板になっているとは限らない。神の中での位階はそのことを物語る。つまり、その支配的な神の宇宙の構成部分は収斂されるものだが、靈的存在にしたところで、必ずしもその一神の確定的な構成部分ではない。このように一宇宙の創造が一神にかかるといふことは、宇宙が無限の神の数だけ存在するということがあり、それは存在を蔽う全体とは異なる、次元の低いヒエラルヒーである。さらに核となり、高い位階にあり、全体を蔽うのは「純粹思考」である。純粹思考の次元によれば、神、宇宙、全体性は意味を持たなくなる。神的構築物の内部で、あたかも外部にあるように批判できる靈的存在及び多神的宇宙という次元の構造が、その外部にある、さらに強い本源的な存在を示している。また、純粹思考が精神的領野及び肉体的領野に現れ、それぞれの領野の存在がその一部分でしかないことが明白になったとしても、その一部分の側から元の全体の純粹思考を否定しきるとき、創造的な「新たな純粹思考」が誕生する。現実を越え、精神、神秘、宇宙の次元を越え、さらに核となる純粹思考を否定することによって生まれる新たな純粹思考こそが、あらゆる無限の姿を指し示している。まず、未来が先にある。実は時間は逆転した意味を持ち、未来は生まれることが作られる。生命の流れは過去に向かっていているのである。それゆえ、新しく生まれるのは過去であって、未来は生まれることはない。時間とはただ点在し、場所ごとに濃淡をもつにすぎない。時間の存在とは、その宇宙を構成する物質が何ら意味を持たないことを隠蔽するために、ある方向に流れていると錯覚させる技術である。その証拠に、時間が存在していないと規定すると、物質の存在はその意味をなくし、その宇宙の現実というものがあつというまに崩壊する。つまり地上的現実とは、それを創造した神にとつてもただの実験的な場で、そこでは時間という道具を試しているのだ。他の神の介入の痕跡はあるにしても、地球は時間というつまらぬものの実験場である。物質とは時間の凝縮されたにすぎぬもの。純粹思考は、物質的な死が何の意味も、まして恐れも必要としないことを明らかにする。また、精神、観念、神秘、神とそのヒエラルヒーをつねに批判し、否定する立場にあるから、それぞれの次元でも何ものにも収斂されず、どの神とも対等かそれ以上の存在である。なぜなら、純粹思考はより本源的な創造の場面だからだ。《妄想》は(1)現れはどのようなものであれ、ほんのわずかな一面であること、(2)前項を自らの多面性によって証明できること、(3)その多面性が増殖的であり、創造的エネルギーを持つていること、(4)そのことによって宇宙の構造を示すこと、(5)そこで到達した己れの全体をも超越することによって、一気に純粹思考の誕生に至ることが可能である。

緑字生ズ

136 *barrel*の一瞬、鉄塔が切り崩され、地面に押しつけられ、地球の内部を発く点、刻、彫、版。鳥類の水平飛行、河と海を埋める魚影、水面に突き出た棘、楕円形の口腔。光、暗闇をうねる波、そのつながりの連峰、雑居地。街路を盗掘する男の肩の暗いラピス・ネリ。全気候と気流の愛を受容し、厚い雲に鎖された空。おお、人類の苛酷な銃撃はつづく。しぶき、巻き立つ火焰、消さるる炎。湿原のムカデ、触覚から触覚、そして環。とどまる生、流れゆく死、猫の舌と尻尾、熱い弔歌。注视するものの存在の貪り。風にはじかれる鈴。静止の中の速度。

137 白雨あり。踏切警報。異常な緊縮。秘匿すべきことば。青い死の光を搗く金属。しめじめと歪ませるもの。幻の輪郭。内臓脳。緩慢なる膨張。白い星。点滅するバラ。さらなる収縮。愁いと投企。戸籍簿。連鎖すべきことの拒絶。触れうるもの

あやうさ、ふるえ。沈み込む輪郭。伝達される暗号。淵。襪。游泳。軟体動物のくねり。しだいに粘りつき、薄い膜となり、浸透圧によってくり返される *solliloquio*。

138 ギボシムシと火銃銃！
アルクヒューズ
潮の核心を貫通する
からくれないに燦く卵
生命の首飾り

139 はたたく海鷹
エプシロン
生命の暗渠、円形墓地
存在の滴化

140 *Jacob*の杖、バレストイラよ
下着に醬油がこぼれている
またしても光の彼岸にとじられる石炭袋
からくりの回る向こうのからくり
メビウス環の変成男子！

鱗翅目の系譜を追って
地球の時間を
あたためてみる、ゆるめてみる
からくりの中で透明になるもの
腐蝕した太陽、凍りつくかけろう、うすい息
ぐれりぐれり
地球の創世に沿って
からくりが回る
べつべつの道筋とべつべつの坑道
出会いと別れに違いはない
色のつかない光が粉と化して
裂けて堰を切る

141
光は敵だ！
そらいろの鳶が翔ける
虹は見えるものではない
ヒッポドロモスから橋を渡って
次の機会を狙っている
雨も降りやみ、微風とてとどこおり
太陽だけが饒舌なり
ああ、音もなく崩れ落ちるものら

142
麝香とビュラン
しめた！
声高にひと声吼えて *urang-urang*
下腹を割る憎しみ
涸びた茶は血を好むのだそうだ

143
もはや腰などは臀部、音だけが立つ
倒立する肉体
苦難にあふれる路上、世界のくびれ

ゲニウスよ
祈りだけが分かつもの
人々の白骨、一千体の人形
死ぬと決めたときから生きつづけるもの
梵鐘、瓦、橋、水の硝子、木戸、苔、石、黄体ホ
ルモン、名のみのも……

144
疲労と睡り、絶望と苛立ち。みもだえすることと
ふるえあがることと泣き立つこと。青年期の恋愛
裏切り。未明の、身を切る哀切。白狂の、凄じい
収奪。闇の中での変化、ひびわれるような肉体の
たかまり。告別と復活。自らの尾を咬む混沌よ。
寛容さと死のゆらめき。聖なるものの鞍。ただ冗
長な波のきれぎれ。

145
はだけがみ。
うららかにむれつく樹脂の匂い。

裸のまま遠ざける。女はうがたれたまま足首をひ
ねる。なめくじを越えた全身舌。

わたしから脱け出した悪魔よ。自在で、硬直した、
曲折のセヴィーニエ。それぞれはそれぞれだ。

流木よ、還らねばならぬうつせみ、その笑い。行
為の思考。裏打ちされているもの、囚われのシャ
トレース。下向意識の収斂される場というがまが
えるが不鮮明にされ、空間的な揺がりの仄めかし。
ああ、乖れる肉体のアカシア未生。

断続する精神が形成する尾根。動態としての連続
作用と、それを織りなさざるをえない不連続の連

続の接点を尖らす、時の底に流れる深さ。逆しま
に裏つけるもの。等価でも等質でもなく、*empire*
の構造がことばを越える。

銀の鎖が透明な硬さを保ちえたのは、子宮願望の
向こうにあやうい *balloon* を予感したから。自動
小銃からばらまかれた *emul* は抵抗だが、抵抗は
梅雨空とかかわらない。そしていま、帆に満つ風
の声。

トコウマシテツケザアドナゴンベコジタレフリア
ノカッコタレフリアトマカナタレフリアトウソシ
タレフリアトタカキタレフリア。
そしりはしり、それが航海のはじまり！

146
霧の方のエオスよ
幻の頭蓋骨を造形せよ

その暁の蟻酸、若い肺を抉る……
星合の祭は移り

朝けぶりにゆらぐ 汚れた横顔
焦げつき、定まりのない えきえぼし

147

ねぶるものらのねむり
はだかの *Orehis*
しりだちからからみねへ
ねむりのなからすいぬめる
からみねからしりうちて
たちあがるもの、もえあがるもの

うすみどりの朝が立ち
死産の卵をしゃぶる
からみねとしもとだち
マスチックをほごして裂けるもの

148

迷い猫の後をつけて、眼は見ず知らず
ガラスの破片の浮かぶ都市や
天袋を覗くと小鬼のミイラだったり
けたたましい哄笑にも、死体は立たぬ
(童顔の、なんてひがみっぽい苛酷！)
虫のように息をこらし、そのままトパーズとなる

跣足、*flute*、白い唇、水晶の朝、ああ

宝石の中の *Pantolon's box*

輪廻の智恵の環を
エメラルドの海に沈め
未来と未来の未来を甦らせる玉手箱

149

アジサイに包まれて
涸れはてたものを密葬する夜
伸^ス眉^ツ、月影の女の純白
ともに終わろうとするかげろうの血
紫色の光沢をもつ金属の断面
耳から外れたジランドール
時間がかなきり声をあげる
蛾をつぶした指を見つつ
命を垂らす季節のあるなし
雨季のあとの訣れ
君は睡ったまま
支配者の静かな貌を見る
下腹の胎児はいずこ
闇の転回力！

150 倒立した円錐図形、

150

倒立した円錐図形、シヤクナゲの可憐な綱渡り、秋篠寺の黒い石が汗をかいているので地獄の軸を昇つて

雷除土器が

眼の穴から盗まれるに違いな

察するところ、

杓しやくけきオリンピアでは

パンクラティオンの凝灰岩が

ゆるく波打つとともに

徐々に液体化して」

白昼、群衆をひきずり込む

151

寝息をまねて脈をとる

顔のない顔

その皺しわの中を軀こゝろが流れる

交わりではなく

甲かぶいでもなく

呪まじないと愛あいですらない

目も耳も鼻も、口さえもなく

六本の足、四枚の翼、

黄色い布袋の姿が
赤い炎になる

狼おおかみでなく

牛うしでもなく

ウイニエツトの中に棲すまむ

思おもいつめないで!

口笛吹ふいて

いま扉かどを開ひらくと

眼まなこに映うつる眼まなこの毒どく、ごろごろの魂たまご、結むすばれざる涙なみだ

ああ、無意味むぎみなることの子供こどもたち

猫ねこの耳みみと称なづばれる

ヒマラヤ杉ヒマラヤスギの下蔭かげから

玄くろ閃ひら閃ひらに入いると

股間こかんの化粧けいじやうを終おえた少女せうじよが

单眼巨人たんがんきじんとの死闘しとうを演あじていた

尖とがった苦くみが走はつたので

虫むしの涌もいた布ぬで口くちを拭ぬぐと

折よれた蟹かにの赤あかい爪つめ

さしだされた花はなびらを齧かむ

光る中、かかとまでの汗

横恋慕ではないか

そむけられた横顔、そのときだけの義眼
少女の付け根の血に、思わず息を

じりじりと燃えつきる踊り
じりじりと燃えつきる踊り
油を絞る畸型の時間……

油を絞る畸型の時間……

153

人台の前で尾を置き忘れた両棲類、泉のように頬
をふくらませた男の死亡通知、女の軀をつたう男
の汗が闇に光る、ひそひそ話と私服のメモ、奴と
義兄弟のつもりになるな、遺されたこもこもを理
解するな、ふん、ホウセンカの種め、行先を告げ
ず、にたにた笑う運転手など糞喰え、紙幣を奪取
し細かく破り捨てると、紙吹雪がひとつひとつ義
眼となつて首の直前で剃刀となる、おお、ぴかり
と閉じた子供時代、雪景色にさよならだ、男は梅
雨の到来に瘦せほそる

154

舷梯を跳び降り、夏の空は眩しい

マドロス帽をあみだにかぶり
村外れの崩れた壁を背に
女を抱き寄せる

日盛りと杜松の匂い

一口放り込んでから

広い、埃っぽい道を歩いてゆくと

深い酩酊にとらわれる

小色のひとつたつなどと口ずさみ

糸杉のある墓地のあたりで

片目をおさえる飛燕草

雨水のはけ口で足をとられた

日曜だけの恋人の、青い肩

毛の薄いあらゆる感性なんてまっぴらと

意味ありげな含み笑い

かどわかされたうわばみと

粘液のような生物の男根

ゆるやかな起伏がつづき

オリブと葡萄の畑が

永遠をめぐけて広がる

この島から盗むべきものは

谷でへだてられた向こうの丘の

収穫者の杯という、凍る石

155

握力と鮮血

羊水があふれ

地球が母の姿を現わすと

寸前の胎児が死にかける

156

黄金の木枯し、骨だらけの枝

樹液のひからびた幹

唇と放尿

反目の首が嗤いながら咲いづく

157

その壁画は

アカンサスの葉飾りのある

alumnusshで囲まれているのだが

室内で交接する若者の多くは

見つめられていることに気づかない

肉体が外され

何かの拍子で陰毛に火がつくと

めらめら火焰となつて

傍らの、緑のカーテンが灰になる

158

星からの悪い知らせだ

ねえ、マスター!

太陽は衰弱をきわめた

the Capitalを見はるかす

相模の原の小倉山

真紅の菊のうたかたの

159

撥げ、隕石

撥ねよ、両棘矛

不軌をはかるべし

燃える獄舎と恋のまなざし

溶ける Patinaの、血の蒸気

160

旺盛ナルメシア
 反抗期ノヒエラルヒー
 勝利ヲ目前ニシタルコオリック
 神格化サレヨウトイウスビロヘータパリゲ
 アバリジニートアポーシヨニスト
 死亡スルインターディクト

161

ラレースよ
 微毒の源、方舟にわく蛆よ
 乱気流の中を移動するアジビラが
 火の鳥の首になり
 ようやく首都を呪縛する
 blow up the Diet!

162

一億の首を吊る目のさめるような夢 未来という
 濃淡にさらされた銀河が、音のない世界にもたれ
 かかる死、投げだす死 地平線の破裂、ひろがる

163

烟霧、静脈の夕焼、墜ちる寸前の火球 沸き立つ
 ものを見よ 物質という時間の塊を破壊する渦、
 速度を食べる渦 坑道のとどろきを聴け 海賊船
 と錨、波止場の女、GIRL! あまたの故郷の守護
 神たち! 大洪水や地割れや噴火のもろもろを一
 挙に呑み込む、無色透明な渦、*swirl!*
 ああ、言葉のかすれ、裏返し!

アルメニア産の粘土でできた男が
 (窃かに夜を見て)

かぎろう月のあおく匂うぞ、と呟く

疎水をさかのぼると

ムラサキカタバミの咲くあたりに
 精神病理がつっ立っている

頰れた肉体はよみがえることもなく
 白蠟化した鬼が酒に乱るる心なり

かわいた眼窩、脂の浮いた顔の

その鬼がケタケタ笑うと

タルタロスの軸を昇ってきたからと唖す
 ふむふむ、脳髓の尺度には通行証が必要だ
 それにしても

風のままの生涯とは何という音色！
（たまもなす炎のひと垂れ 残酷な宇宙）

164

サーカスの来た朝
鏡の中によりかかると
ボゾランにまみれた火の鳥のあくび
泥冠りの青天の午後

美少女を拐う道化師の出現で
少年たちは続々と親になる
ミスター・カガミは
回顧録に犠牲者の名を加えると
オレンジを皮ごと齧って

唇から白い歯を外す
ああ、呼吸のたびにふれる空気の色

165

忘れさられた砂場のトンネルが
半分崩れたまま
風にさらされている

街の生命がいつになく淋しいが

ぐり石を見ぬだけでもつけの幸い
地の底の神々が吼える
ゆらめく数珠ぶるえ

Ciudad de México 三つの歴史

ああ、命に刻まれる往来
哀惜の腕時計！

166

銀色の頭髮 タコフネと虻
象徴画法に目くじら立てるな
魚の瞳孔が光り
蛇のごとく舌からませ
洞穴のような口腔から
熱病が滲みわたる

唇が裂ける
なぜ、もう世紀末なのか

林檎だ、林檎
記憶と虫干し 乾いた空

167

魂くぐりの電車が

時間の濃淡を呑み込んでゆく

いとおしき大地、つらなるうらみの山脈
からみあう妬み、ふりきれぬ哀切
きつと発狂するような

とんでもない呪いと無限のトンネル
魚類をかきわけ 鳥類も
いたるところの花々も

橄欖、白鳥

驚だつて禿鷹だつて

ジェット機だつてピンピンなのだ

感覚を裂かれて夢となる

錯乱を裂いてからは、何も生まれはしない

この快速は

変しい変しい変りよう

ケストを巻いて

永遠の愛をつらぬこうと

168

八重桜 夜の契りの炎の滴

別れ霜 墓地はだらなり灰まみれ

お粥腹、お粥腹 なんとるホリヒュムニア

くれまどう水に流るる月、炎、首

はたたかな水に流るる草木と血の石

いまだしの眠りの夢よ 桜のいろ桃のいろ

はだごころ蛙のぬめりそのねむり

砂青く山吹に埋みて卒塔婆傾き立つ

翳りなく流らう苦楽、血と百合と

墓をあばき、その生き魂の別の断面

169

黒ずんでもおらず、澄みきつてもいない

行んでも、駆け出してもいない

肩を寄せ合うものも

抱き合つて泣くものもなく

山巔を染める夕焼が

忘却のように

動悸をつのらせ 陥ちてゆく

泥の季節

小岡井文村
中桑原村
牧村則哲
福原哲
紙田

ツバサゴカイを垂れて

あらためて水の中に蠢くものを探る

疾走という火照り

衰弱という力

目前の死よ、扉を叩く破滅

心ひかるる波、波

振り返つて巢へと戻るもの

青い闇の底で発光するもの

*camera obscura*の中の

鏡に流れる無数の貌

死樹は生樹を嗤う

ああ、衰弱

最後の夜に、匂いやかな異物

出生は膾をくぐった時からまどろんでいた

170

神が神であることから始まる神への愛

汝を絶望する汝への愛

愛が愛であるから汝は失われる

神が神を露わにして

汝との凡庸な構いに耽るから

汝の棄ててきた日常が回帰する

神が博愛主義者だから

愛される汝は裏切られる

神が背信者だから

信ずる汝は忘却される

汝が *clitorisist* だから

無限に苛まれる

172

梁に吊られたトウキビ、タカノツメ

爆ぜる白樺 少女の煙

田舎を懐旧しながら

エラトローよ

地球のもろもろを擦り抜け

罌粟の実が一千一体のカンノンとなって

永遠の時間に浮かぶ